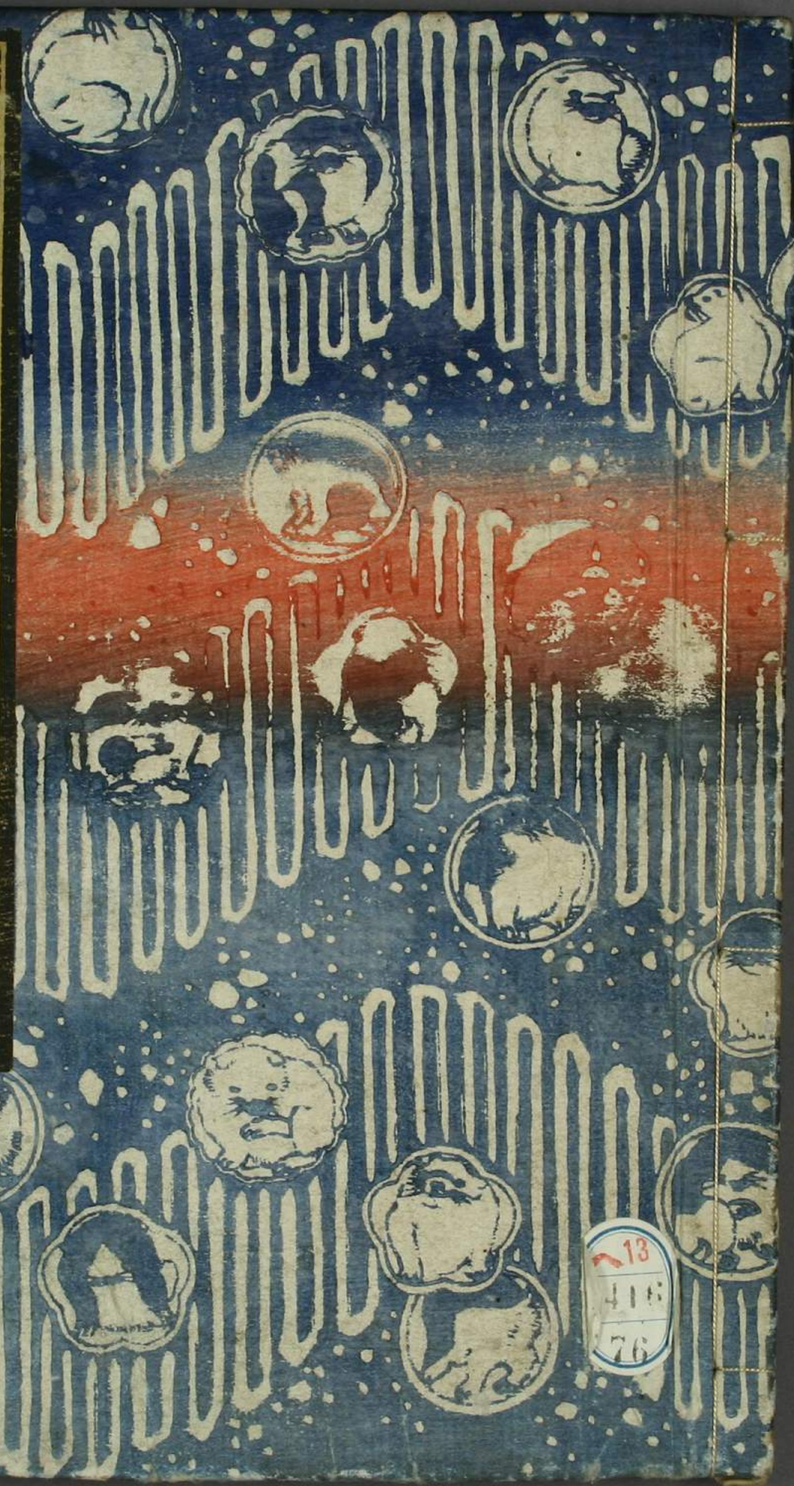
里見八犬傳拾三編 巻廿八



13
416
76

34.16
76

拾二編 太閤記内 廿八

杉野勝茂院

南總里見八犬傳第九輯巻之二十八

東都　曲亭主人編次

第百四十四回

犬江前諾〻〻関符を請ふ　澄月が一謀五虎を獵る

政元既ふ余市を誅して敢其身の徳を飾まく欲されども室町殿義尚の御氣色の穏ならぬもあるに世の悪評も已ざれば安らぬ胸を鎮めく両三回尋思て做ぶ稍思得て笑あれば猛可ふ使者と遣して京都の五虎と号する秋篠將曹廣當澄月香車八直道等並ふ鞍馬海傳真賢等敵齋經緯と家臣種子嶋中大正告紀内鬼平五景紀を召聚る秋篠廣當那虎の防禦として北面の武士皆悉朝廷を守護なれば暇なとて招ふ応ぜず又澄月直道は曩ふ犬江親兵衛と閉槍法ふ亳も克ぬ剰幇助ふ出る鬼平五が未熟疎忽の礫ふ打れて落馬あける折の為体を

京童が曲子を作て謡へば隠れもなくもあるべきの故に営中の沙汰を憚りて身の撲傷癒れども
なほ儘病痾に假托て尚屏居て在りしが亦政元の招に応ぜざりの餘真賢・経緯等も
正告と景紀に異議多く早く参りぬ登時政元對面してみづから宣示たまふ白川山の
霊虎の事の趣い汝等も及びけん我既に洛外なる獵戸們を召課て獵捉せんと欲ふ
他なしい只渡世の弓箭銃砲ゆく武芸藝胆勇の者ふやうれい傷損ありて寸功なきをそ
汝等ら今命をふたの弋を以て各銃砲を捉れる列卒二十名と従へて倶に那山に求獵得て
大功ゆべ先度の恥を雪るふ足るべしとのたまへば驚く仆而非猛者們い憶ぜも目と目を注て
答難るを中に真賢と経緯い權且して倶に御諚美しけれども那虎い真物にあ
らぬ故に画圖の化るべ力をもて征しくから鄙語に云餅い餅師そ山獵とのく生
活ふもの獵戸をう徘徊ふく在下なるに及ぶべもいるも此に伝る中太こそ銃砲をもく
禄と食む聞人をそしへば獵戸們に立勝りく能まるものやいかを讓ると正告推禁めて開いい

海とをるに那虎の出見れ折咱ち鬼平五と共倍に撥る制めまく欲せしかども実に是人力の
よく及ぶべ物にあらず其後又仰を稟て洛内洛外を求獵りしに所在い知れず異風い首級を
のみ見る奇瑰あり小るに今い白川山に在りとのべども風聲のみそ出没不測の変化に
非如那山を求獵るとも深く隠れて影だにもなく見れぬ這回も甲斐なきをのべ主君に朝
夕云云と世の悪評もい彼臣ども銃砲の精兵を各四五十名相従へ一條より三條まで
那方の河原をうち戍らい愚民們安堵仕へむ倘又那虎山を出て河を渡さ暗
號を定め諸隊と合して轂を捉る便宜もいるむと舒る意見に景紀も嗾ん枝め額と働て
現正告の稟を弋い恐れるに愚意も同じ山い虎の巣穴なり況那山い如意嶽比叡
比良の高峰陸續して連山波濤の勢ひあり廣く険し山路ゆく労して功なきを
河原に在て他をもい地の利い既に我に在り実に便宜ふ真賢・経緯等の議を

喜しく共侶に河原の勤役を請しかバ政元ハ如意ならねども今亦正告なきが言の趣もその
理なきにあらざれバ已ことを得ず其議を饒して亦らバ且若党が請ふ随に任して愚民們の安堵を
得るや不をもて見ん因て海傳無敵齋中太鬼平五等に火兵各五十名を隷遣して河原に勤
役の頭人とし兵飯並に火薬ハ有司に談して受合すべくよく勉よやと命ずれバ正告景紀
眞賢なる經緯も共侶に言義あるぞ退りける恁而五七日を歴ぬれども京師の貴賤安堵
せず虎の在る山を背にして河原を護るハ何事ぞ河太郎を水虎といへバ虎も亦水に棲む者と
や思ふ烏滸人と云京童の癖なれバ亦復是らの悪評あり政元これを洩聞て安からず思ふ
と思ふものから那頭人等を召返さんハさすがにて更に亦徳用と堅削を閑室に招よせて那虎の
顛末を解示して却ふやう和尚のヲカハ人みな知れり今亦それに加るに師弟の法力をもてせら
れなバ必是大功あるべし那霊虎を對治して先度の恥辱を雪めずやとのりて徳用沈吟して
其義ハ仰あらずとも望む所にハ候へども原肉身の獣ならバ我六十斤の鉄杖もて棰にその甲

斐あるべうもはべらず約莫恁る変化ハ人力をもて征せんより有験の法力にあらずハ得がたし倘臣僧に調
伏の修法を任しめ給ハバ一七日にして小験あるべく二七日に大験見れ三七二十一日にして那虎自
然と滅息して上下安堵のおもひを做さん何の御疑ひか候べきと誇りか貌して説誇る其言も亦理
あるに似て政元本性修法を好めバ然也々々と點頭て則其議にうち任して館の内なる乾
浄処に護摩壇を飾らせて明く徳用堅削が祈祷の效あるを竢程に一七日を歴ぬれども其
と思ふ験ハあらず既に二七日に逮ぶまで那虎の嗜すハ已まで洛中息劇しかのミならず北白川の
山里なる村長故老們ハ亦復政元の邸に詣来て訴るやう那虎ハ今も猶山中横行す時ならず
とバ里人都て生活を喪ふて飢渇に及べり係ても對治遅延あらバ里に人種ハ盡ぬべしといふて
と悲告く請ふこと両三番に及ぶ程に東山殿も室町殿も政元の出仕ある毎に那虎なるを
尋ねひてなどそ對治遅滞せる撰擇に応する勇士ハなきか歟いかにぞやと譴めバ政元一句
も答に由なく只赤面して退るのミ心速りに焦燥がら推鎮めて思慮るに士卒を養ふと

千日ゐるも一日の役ふ立んとて之ふ尓ゐふ種子嶋正告紀内景紀鞍馬真賢安敵齋經緯及徳用堅削ハ皆我が恩顧ゐ蒙ゐ名と厭ひ命と惜まで敢憂と分ハ者ゐ。他们まゐ憑ーかゐ及今の世の人心感相似ゐ开が中ふ猶も擇め一人ゐ那大江親兵衛ハ和漢獨歩の勇少年弓馬力藝千萬人ふ捷れゐのみ学問廣博智慧量義を見て勇ミ一人の恩ゐも思ふ本性ゐれ他を招ゐて問試ゐ憑まゐ遂ふ霊虎と對治ーて我與ふ面と與ま大功ゐゐむ今まで他と漏ゐーハ然ーも京師ゐ人ゐと思れんとゐゐて胡意ゐの議ふ及ばざけ。我ゐゐ嗚呼鈍ゐ悔ゐ且羞且獨領ゐ主張既ふ定ゐけれ先他が機と取んとて夙く近日ふ吟味て秘藏の名馬ふ花美ゐ鞍鐙皆具を措ーて是を庭ふ牽入さゐて然而親兵衛ゐ召せける。尓程ふ犬江親兵衛ハ這日政元の使を受て主の今恁慌ーげふ我を召るハ何事ゐ。と思ふめゐ。敬馬ゐ也せゐ徐ふ衣裳を整兵ゐ使と俱ふ來ゐれ政元ハ笑げふ身邊招ゐて。ゐ。什麼親兵衛恙ゐ。我頃者ハ公私の勤務ゐ暇ゐて憶ゐ疎濶ふ過ーゐ。今日偶の見参ゐれ和郎ふ會ゐる東西ゐあれ先他と見よかー。とゐて庭ふ指さゐて親兵衛急ふ元又ゐふ。ゐ。親兵衛那馬ハ近日我封内阿波國美馬郡剣峰ゐ忽然と出ー來れる。是蓋世の龍馬ゐ我是を獲てーゐ走帆と命けゐ鍾愛ゐ実ふ是千里の能ゐ。今是を汝ふ與ふ什麼意ふ稱んや。とゐれて親兵衛遽ーく席を避け額と衝ゐ。ゐを辱ゐ御賜ゐの馬妙相皆具ーて欠ゐる処ふ。ハ千里の駿足ゐると疑ひゐ。且那毛色も奇妙ゐ実ふ是蒼海洋を走る白帆ふ似ゐるゐ。如右名けゐ名詮自性ふ妙ゐ昔唐山三國の時魏の曹真ゐ駅馬を驚帆と名けーゐ古今注ふ見えゐ狡敬馬帆と走帆と和漢暗合愈奇ゐ然ゐと今在下ふ取せゐる一期の幸ひ有ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。造化ふゐゐ喜び氣色ふ見れゐ。政元倒ふ訝りゐ。ゐ。ゐ親兵衛我ハ和郎を愛ゐの故ふ。ゐ比ゐ幾番と

き名刀。家の花號まを衣裳或い金銀調度の類世ふ稀るを與へ〻ふ毫も喜ぶ氣色
なく。其折毎ふ固辭れ〻ふ那馬をのみ愛悦びて受〻い甚る意ぞやと詰れば親兵衛然
い其御疑ひい理のるから。在下東藩ふ在り〻時我老侯の賜ハせ〻青海波の名馬あり。并
も亦千里の駿足ゆて善ふの馬と相似たり且青海波ふ走帆い妙對暗合奇ゆて妙る
名號宜なのみるぐを在下這回の上京い浪速の浦まで水路ふ乗れば那青海波を牽せ
ば〻ふ思ひ付る如千里の名馬を賜り〻喜び別条ふもいを。今ゆもれ身の暇を賜りく
安房へ還る折を待ば這走帆ふも乗りく。千里の遠路も只一日ふ稲村の城ふ到らんと思へば
辭ひ難くそ受奉りい如自餘の宝貨ハのみる愚衷他支るくいとふふ政元苦
笑〻て今ぢ〻悔〻く思ふめるる。却已如ふ申られば然氣る如面色〻て天晴忠信恁ぞ
ぞの東西所要ふ立ば我も亦本意ふ稱ふく。珍重〻〻就て又一説あり。御尚ふ和郎ら博
識ふよりて唐山の故事さへ思ひ合ま〻那金圃ら虎の圖の。如瞳子と呼做さ〻の來歴

異聞ふ疑ひまれ。其画の券主竹林巽風ふ命じく其画虎の両眼ふ新に目子を點せめあふ。
事怪むべ〻件の虎忽然と脱出く人を害ひ世を騒〻。今も高白川山を栖ゆて那里在の約莫
這一椿事の顛末へ世の風聞を知れ〻るくん。然ば言省て今具ふ世ぞ我是故ふ心を苦しめ。
或ハ獨戸。或ハ勇士を募りて那虎を對治せまく欲り〻。或又神祇陰陽両家の厭勝
修法。名僧知識の加持讀經各其功徳をのを禳まく欲まるゆの。數日ふれども効ふ世ん人
力法力両るく〻纖芥も経驗る〻上の譴責。世の悪評我身單ふ集り。我面目を喪へども
せん術るを查〻ねか。然れども和郎ハ如年の勇士ゆて。学問廣博智慧深官。菅家江家の老
儒も。優りて憑き覚れ。問て惑ひを釋まく欲を乍麿何ぞの術ぞとて。那虎妖を鎮んやと問
れて親兵衛阿容る色るく。謹て答る。下聞を四敷せ玉ひべを弱冠菲薄の在下ふ時々仰合
さるを。博士態て答まるハ烏滸がましくも。安礼ふ伝れど思ふ〻と稟さまを。反く不忠告ふ似る
べく。并も愚の本意ふ伝ひべ罪ひがまし。如言るから。其憚りをとるを。肝胆を吐ひむ。抑元弘建

武の擾乱より世ハ戰國の今に至りて戻る者ハ君を殺し子なる者ハ親を害し夫婦相背き兄弟離言とるも間ヨりて故に天変地妖屢見れて上一人より下萬民に儆戒を示せども仁政行れず反て奢侈を恣にして貨を弄び上に習ふ下これ是に大利を欲す。奸民も亦多し今番那虎の圖の妖怪も職として此れに由れり然ハ孫老聃が道德經に道を以天下に蒞めば其鬼鬼ならず其鬼鬼ならざれば其神人を傷らず物千歲を歷て靈あり靈あるとハ変化自在遂に崇を做さるとを云ふ那金國の画の虎妖の如き是なれども明君上に在り賢相是を輔佐まゐらふ道を以て民に蒞めば鬼も亦鬼ならず人を傷る患ひなきなり。壁言ハ唐山の德行の守令なり宋均が九江の太守なり時其郡に虎多くして宋均則民に下知して其檻と穽を去り防せざりしかば其後虎ハ皆江を渡り在らざりしと云故実なり又劉昵が弘農の守なり時異政あり其地の暴虎皆子を駝して河を渡りて去りしとなり是ハ正史に載せる所浮説言ハあらざるべし又孔

子家語に孔子泰山を過るとき婦人の哭をうけ給て其故を問ハ對て曰舅と夫と及兒子皆虎に喫れたり小らべ去て他郷に去ざる否と。夫の地方ハ苛政なれば也。孔子是を聞て歎ぜらく噫苛政ハ虎よりも猛なりと。故事もかくの如し蓋政ハ即正なり身を正しくすれば令せざれども民感従し國を治め家を齊の天下の平なるも人平なるものハ是政の好なるに賢相を云ふ這義を事とせよ。明君と輔佐まゐらば白川山多暴虎も患ひと做さず足ざるべしと憚る所もなく諫る政元なりて嗟嘆して然ハ其政の好なるハ儻に咲く者あらと。ゆゑに冠を見て鏃と磨ぎ飢に蒞て稽を植るに亦何ぞ異なるべし。今の迂遠なる事をせんより臂近なる術ゆゑに向れて親兵衛又いはく機ハ是事に先なる者也。一善なるに做すべきなれば其機先天地に亘り一悪内に萌さんとなれば其機動ずとなり。然ハ德の流れ行ること水の流れ火の登るに異なるべし。今日これを行へば今日必行る。迂遠にあらざる賢相ハ只那虎對治の一義をのみ

急ぐ為ぶ。開も做ぐ云ふいわぢと。とふを政元うち歩て。開ハ又甚多便直あるやと。問へ答て然ハ今愚意をもつく論ぜれば。那虎故禹の変化へも。既ふ霊あるて人を傷れば。必是形體あるべ。倘形状ある陰鬼なるべ。非如人を傷るとふも。陰火の物を焼ざる如く。骨を折り血を流さ挿ぬ善せんや。既ふ形體ある者なるべ。或ハ弓鉄前鉄砲の及べぎとふハ。猶戸閉ぐ。怕れて力を盡さる歟。勇士とへども耳怯してよくも思ふ故ふそいなる。倘亦陰鬼の類ゆく。只人の目ふ見れども。実ふ形體ある者なるべ。墓目鳴弦の法術をもつく。他を攘ひ鎮むべ。熟の方ゆも弓矢前をもて征する術のなるべぎと。鮮れて政元胸啓けく。うち含咲つ。點頭て。是ふ余へ辯論明亮數日疑ひ一時ふ釋ち。願ふ和郎我ゞ與ふ白川山ふ赴て那虎を對治せよ。大功あ。甲まれ。賞禄ハ乞ふ儘せんも。憑むと。叮寧ふ。詞ふ他事ハるらしと。親兵衛義ゆて。便宜をゆくまで。忻然として答るやう。在下淹留稍久く。既ふ幾層の賜あるて。一介の功なを。心苦しく思ふ。那虎對治の懇命ハ是本来の面目へ幸ふして成ぜ事あるとも。恩賞ハ願しくぞ。歸東の暇を賜るべ。とふと。政元笑ひて。和郎の情願然るとなるべ。人のよくせ。虎猟と成ゆて我這憂ひを釋ぶ。則是當家の忠臣益世の勇士へ。ふらんふ我封内の郡を悉皆與へて。倶ふ將軍家ふ仕へ。あの東へ還るとなると。真実立ち林死れば。親兵衛徐ふ入ふ。ふ。御意厚ふ。ふ。ねども。匹夫も志を奪ふべ。都下の武勇士諸山の名僧各ゆと空しくして成ぜ。霊虎對治の実命ふ従ひ。ふれる。ハ富貴利達の為なるぞ。這功をもて歸東の暇と賜へと思ふ。存ふ然るとも。饒しぬ。て尚留ぜ。欲しぬ。縱首と捕らへ。其義ハ御免を蒙るべ。在下單拔生く。虎と那山ふ求獵るとも。不幸ふして虎ふ遇ふ。日を歴て餓く死へ。阿容々と山と下りて那里へ。ふ。ふ。又幸ひふして虎ふ遇ふとも。我力及ばぎして命を其首ふ喪ハ。世の胡慮ふ。ふ。ん。ぬ。倦ぎ。危く。空ハ一大事と知ふ。願ひある身の悲しぬ。言既ふ。ふ。盡せる愚衷を憲査れかしと義を見て勇む。英士の霊魂輾ぎ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。政元一乗寺時沈吟して。肚裏ふ思ふ。現這後生の神々ふ。必是那虎と。對治の大功なるぞ。開なるを。歸東の願ひを。も。饒さ

ぜハ他も亦我命令を空しゅうして必虎を獵ざるべし。我始より心を用ひて今日まで留めし這後生を放ち還さハ惜けれども虎の一笑ハ我上ゆく。龍辱安危ハ此の舉ふ在り。恁れば歸東の願ひ城饒して成せる事あるや否やを見るふ不如と啓ゆくふ主張ありうち點頭でやれ親兵衛和郎の情願人各其主をなふ其忠誠を感ずるあまり。那虎對治の大功あらば。我將軍家ふ稟上て其身の暇を取るべし。その義ハ寧疑ハで疾山獵の准備をあらまほしけれと感ずべ。親兵衛ハ阿と応て膝の找むを覚ぬまでふ怡悅ふ堪ず額傷て。賢相維上ふ在ず目今免許の御一言ハ則是將軍家の台令ふ同じかるべし。疑ひなるふあらねども猶一條の願ひあり在下賢相の威福ふよりて。那虎を對治し畢らば。徑ふ近江路ふ赴て。辞せずして安房ふ還ん。豫聞ふ辛崎坂本逢阪大津。その四箇所ふ新関あり。管領免許の関符なき外藩の武士を出さまじとぶハ実事でいべし。目今その関符を賜らぎハ期ふ臨て進退不便ふいハむ。いかゞ今疾賜れかしとムひふを政元うち笑ひて。開ハ亦大く性急の和郎那虎を對治するやを知らぎ。

てぐさ　こ

ゐ実をもちゐハ早くもぎ。と詰れば親兵衛莞爾と咲て。その御疑ひ人ふ在べし。在下不似ふいへども。詭言をもくゐ実を受て約ふ背ハ関を越て安房へ還る者ならば。今日まで御諾を重て。逗留もべくもいハぜ。今関符を賜らぎハ安心して打立べし。然でも饒さぬやを連りふてまそ。政元ハ困じて頭を傾けて。介もぞふ思ハぶ。是非ふ及ぎ。ゐ実を含せぜ。と咎て後方をうかゝて。一個の近習ふ吩咐て。文句ハ箇様々々ぞ。とゝろゐさまつゐ実を寫して。躰くもうち花押を印て卒とく與れ。親兵衛ハ遽しく膝を找めて受戴ぜ。故処ふ退て。閑ふて徐ふこれを見れば。其書ふ道ら。

安房里見義成使臣大江親兵衛仁事。

右因今淹留本邸。然今般以命對治白川山虎妖之義。故進退儘他之情願。若有其功而證据分明。則當許過其關隘而歸東也。其功朱分明非見所殺虎雖云欲出關門。敢勿許。進止宜從此旨。文明十五年十一月日示。

辛崎坂本逢阪大津四所関守等。　左京兆　花押

けり。親兵衛這書を讀訖て巻て懐に夾れば。政元の又いふやう。和郎那山に赴くに弓箭鉄砲に
捷まする伴當幾十名を従せんと問に答て。然いは人多けれバ倒に足ざる費縁りゆく。
事に益なし。在下が伴當の安房より相従ひし者毎の久く客店に侍るあれども只その一人を
告知せて。近江路へ卒し置くべし。慢れが従者ハ一人も望しからず候。と辭ふを政元感嘆して。壮
なる哉噫勇なる哉。左ても右ても和郎の随意宜く進退せらるべし。這郎中ハ我外に騎馬
たる者を饒さるども。乗鞍を見まく欲けれバ。大の庭上より那走帆にうち乗て宿所に退
すく。疾山猟の准備をせよ今宵よりしく企て。吉左右をこそ俟べけれといそがし立れバ。親
兵衛ハ敢亦再議に及バず。命ならバ御免を蒙りて。仰に従ひまらせんと答て。躬て退れて早く縁
頬に立出れバ。青侍等がおもろしく馬牽よせれバ。親兵衛ハ鞍の前輪に手を掛て閃りとうち
乗る廣場ゆく。地乗徐に両三番乗遶し乗復して。卒とあゆみに青侍等に案内を
憑む騎馬の礼鞍に額衝ぬ坐席の方に別を示して悠然と。外面投て出にけり。倏而大江

親兵衛ハ名馬走帆にうち乗て。宿所近くなりぬる程に又那直塚紀二六が那日も大部
屋小部屋の毎に餅を賣に来にけれバ。憶ずも今這里にて。親兵衛に行遭て路の傍に跪
居るを。親兵衛うち見て馬を駐めて。爾よ开里なる漢子。汝ハ折々我宿所へ来て餡餅を
賣る經紀児歟と問へバ紀二六。然いへバいぬる比御誂の米饅頭をまゐらせしハ小可也といふに
親兵衛點頭て。汝を労するよりあらねども。といひつゝ腰に挿たる扇子と共に墨
手を早く援出して件の扇子の面背に數行の所要を寫着て乾くを待て推畳て墨手を
收めて爾よ餅師我安房より来ける伴當們ハ三條某の町の客店某甲屋に在り。
中に姥雪代四郎と喚做す一個の伴若黨有り。汝歸路に立寄て。その代四郎に這扇子を正
可く逓與しね。憑むぞよといふに紀二六応をまをして。遽しく身を起して馬の邊に近着て件の扇子を
受禽て恭しく答るやう。仰兼りハ今日ハ毎よりハ早く賣買も果ぬれバ程なく届けまゐら
せん。とまをしてその處を去れと迭の応答外々なく。人の耳目を憚りの関なるに紀二六ハ後門を投て出去

○文溪堂蔵

ゆく程に親兵衛は馬をとめて宿所に入りぬけり。不題悪僧徳用は徒弟堅削と共伴に白川山なる虎妖を調伏の祈禱に日を費して法衣の袖は護摩の煙に燻り師弟の聲を讀經に嗄れて八月の蟬に似れども毫も法驗あることなければ既にして疲労に堪ぬ悄地に遠侍に立ぬ。青侍們と囲坐して要なき雑談をなす程に大江親兵衛が霊虎對治の命を聞て且走帆と名づける名馬を賜り今宵よりして那身單白川山に赴く。虎獵と做す云事の趣を憶らるゝ少知て媚ひて涯りもなきを然らぬ面色して退く。却堅削に件の椿事を箇様々々と耳に告るに堅削も亦怨をふゝむ堪ぬ開いふして可らぬと向へば徳用聲を悄めて然りとはそのゝ我憶ぬも那小猴子に君寵を奪れ以来い做す事毎に感妬るべき是義に試數るに不覚を攬らるゝ怨を復る便宜もなく今番の祈禱に驗をなざれば必ず主君に疎れて終に他郷へ出遣れ是も亦知るべくば分るに今又親兵衛奴が萬に一那虎を擒得て主君の憂ひを除かば如く囲郡を分與へて女婿にせられん是も亦知るべくば非如我

身を異にして生涯その地に在るとも那奴が富貴を見て聞て阿容々々として下風に立んや所詮怨は我に齊しき五虎の勇士に諜し合て今宵那奴を屠數に結果て東國へ走らん豈快らずや。と腕を拱て説示せば堅削听て合点して師父の主張極めて妙人世の鄙語に欲りの駝賃とも云へり。左にも右にも去の後いでゝ来べき宿を思ひ空くして徑やるいそん鶴軒の腐雪吹小姐と搔攫ひて飽まで樂を取て後に妓院に售へば両得あり。一損なし。這説什麽と悄語けば徳用然いと點頭て我いるを思ひ足らず其頭に撫念せざりしかども東國へ走らば還俗して常言に云色中なる餓鬼の苦患を免れんと尋思たれば開やはけん我隊より大爺政元を伴り告るよりあれば那小姐在らざるを折必是親兵衛を慕ふて逐電せるゝと大爺は思へば安い急病起りぬと有司に告て宿所に退て悄地に准備を整へて然而賀茂河原に赴く。疾那五虎の勇士們に機密を示して親兵衛奴を共伴に數る果もべき今宵の便宜を相譚ひ那人々も試數るの遺恨あれば欺びく。

当時京師の五虎は廣常直道正宗真賢經緯是なり。

原の勢坂に在る所の正宗真賢經緯只今三虎と是に景紀を加へて四虎なり。

虎とは是に用が稱て五虎とはいへ蓋書稱に由れる下皆に云ふ如く。

必否とハいふべくもなし。既ニ相譚ハ巣ノ城。汝ハ那里を辭し去て。烏夜ニ紛れて甲夜間ニ。ホ本邸ニ近着て後門の西のくぶ故なる赤松両樹ある。柴墻の外ニ立て。我那小姐を極攫ひて出て來ぬるとぞ。有徒ゑべしとハ豫ねて思ひ設けしかねども臨時の所要もあらん狡とく。親の管る軍用金を百両竊して。懐へ久しく温め措しかれ去向の路費ニ医しかれ欲しかる鐵の鹿杖ハ。最重けれ。汝合出ニ不便ならん。白川山ハ暴虎あり。且親兵衛奴と狙撃ニ。鳥銃ハ要ニ。銃砲二挺を上るると言送もあり。其ニ示せば。堅削満面うち笑れて。現脱落ニ軍師の米配都く隨意せざるを。先急病の趣を告て相計ひぬ。ハ徳用再議ニ及ぶ。又遠侍ニ立出て。青侍を呼て。恁々と有司ニ告。堅削。扶出しの轎子ニ乗せて宿所へ遣しけり。詰分両頭ハ又室町将軍義尚の外様の家臣澄月香車介直道ハ暴ニ管領政元の招ニ応じて。犬江親兵衛と鬨槍の折後を攬りて。のこりの剣。鬼平五景紀。徳の投石ニ撲て額を傷られて。落馬する折の為体を隠

もとよれど人ハ知られず。世の胡慮ニ。将軍家の御覚宜しくも。朋輩の誹謗さ面伏れが身の撲傷ハ愈れども。猶病着ニ假托て。久しく出仕せざりけり。又一層の悪風聲あり。暴ニ直道ハ管領政元ニ招て。鬨槍の場ニ造る折。其義を将軍家ニ愬禀して御免許を禀ける。況安房の勇臣ニ。脆くも負て。更ニ助立の者の側杖ニ打れしを恥と思ふ。阿容る。仍ニ自殺もせず。幾ばくの日を居るハ是他が恥のみならず。幕府の御瑕瑾ハ。上の故ニ。秩禄二百貫を召放されて。身の暇を賜ふ。狡る。衆口喋々。直道これを。知りて。且驚ニ且怒ニ堪ず。深念ニ枕を摧て。砂糖一箇の計策を。ニ。年来股肱腹心と憑て。思ニ六七個の弟子を。悄やかニ招て。件の風聲を耳ニ示し。各も是。上の言ハ。知りてぞあらんずる。我身危ニ即て思ニ那犬江親兵衛ハ武藝標姚。我堂の上ニ出ず。然ば他ニ負るべ。獨我のみあらざれば。執念深怨むべくもあらず。只憎むべハ景紀。他が憍ニ我を帮助るとく。同士鬨を

我が疾を負ひ落馬もせれ怪れば送恨の景紀が在り然るを那奴が陳謝が及ばず五虎の員があるが正告真賢経緯等と共伴が暴虎を防禦の與野兵數十名の頭人と一く賀茂河原の勤役が辨侍をもく沼ちけん誰か其器が勝るとのたまや又真賢正告経緯も亦ぞ一年来咱等と言合へる武芸藝の友誼義が背かず我屏居を訪ひも来ぜこて時を待貌る那勤役アモ快らね然が這奴ども恥を赫変して這樹腸を殴さえと思慮る方すが沼る一箇の算計あり其計策が箇様々々と耳元に示して又いはく和殿等師弟の義が仗く俱が憂ひを分えと思ひ那里が赴かく流言一く事の當否を見よ我計策に従れば其折和殿等と共伴が河原の守屋が赴かく者も謀を怨を復さんとの弟什麻と怒気煽る密説が七個の弟子が迭が面を注ぎるのを応難たる斗ぐ中が順風耳九郎千里眼八と喚ぶ偉雄の壯佼あり卒然として俱が答るやう御送恨の事の趣然ること査一れば俱が慨きいられ我們不似がへる時いが

きく已が頭の蜂吹くのごとく御教諭が従ざらんや冥趣神出鬼没の良策がへば必ずも行はえ期が臨まば我們七名助剣勿論なれ人の変れ者ども安かれと詞雄々きく尉れば自餘五個の弟子も感這使に氣が励されて俱が神水を啜り誓を做して赤心を示す直道解るを怒びく然べ事と急ぐべしとて要金十両を令出して耳九郎等が遽與きげり小程が順風耳九郎千里眼八們の七名が北白河より這方る処々の民屋が赴く流言と云ふ早く賀茂河原る正告景紀真賢経緯等の守屋が彷徨ける時この四箇所一列の覇兵毎件の風聲をうち听く駭怕ると大きさば悄ち地がち聚食皆共侶が談るやう昨今這頭の風聲や知り必往日北白川る一荘客の夢が那霊虎忽然と其枕上が来く告るやう我は是の月氏嘯谷が賀茂河をうち渡して權旦京が遊まく欲を去る所が我は河を渡さずして那河原を相成る紀内鬼平五景紀種子嶋中太正告鞍馬海僧真賢等敵齋経緯等八年来管領政元の恩顧を負て武藝が誇り

氣を使ふ不良の行ひ極く多く。剛又其隊ふ從ふ雑兵们も。錢を欲り一酒を貪り。妻ふ管領の權威を借く。市人の患ひを做さの一個も好人あることなし。その故ふ我那河を渡さの日頭人殺兵編を著る。鹿金ふせ欲を逆達本日の曛昏ふ那里ふ行て見よかし。と仏殿と思へば驚て覚けり。その夢只その一人のみ予ども一村ふ愚直るハ二人も三人も出ずよ。夜ふ入るで夢の告ありとの。その奇談を今朝初て聞ハ虎の卜日ハ則今日之午磨りふ走く可らん。と仏開が中ふ種子嶋正告の隊兵ふ。三田利吾師平と喚做を小頭人ふ。一雨来時沈吟で。衆兵ふ薦めくらふ。いふせんとく今日ふ通れる災害を避ぎ。て長詮議ふ時を移さば。誰ら免る者あらんや。然ばとそ立去ば勤役を免れふ罪是も亦免れるかり。所詮観音寺の城ふ赴く。六角家高頼を降参せん。是より外ふ術なし。と仏ふ大家有理と悟そ。俱ふ逃支度を做を程ふ比叡山下風時ふて颯と音ふ。勢ひふ河原の沙石を吹颺く。黒白も別ぎ。予ども雑兵们らふ驚慌く。虎嘯けば風起る。と古語ふ是ふ。那果虎の出来る間ふ逃げ。と悄喚く。間ふ紛れて皆共倍ふ近江路を投て走り。十五六町ふ及ぶ程ふ勁風早く定り。只西山ふ没ん。と。登時鞍馬真賢の隊ふ隷られる。雑兵の小頭人ふ藻洲千東木と喚做を兵ふ。猛ふ衆兵を喚住め。大家ふ説ふ。我憶ふ我们倍連立く。観音寺の城ふ赴く。も。譬べ首尾蛇ふ似て。一隊の長ふ勇士ふ。ねば戰飯費ふ。とせ。れく。受容られ。ず争何せん。然ば。窘ふ敵地ふいふんより。その日屬我们を。惨刻く罵り使ひる。四個の頭人を誣く。身を安くせん。然ば先両三名早く京へ走り。かり。く。舘ふ訴ふ。事ふ。小可ら。ば頭人種子嶋中太紀内鬼平五鞍馬海鳴を。敵齋經緯ハ河原の勤役功る。故ふ罪せられ。ん。と。ふ。怕れて。反て。俱ふ逆心あり。悄地ふ六角高頼ふ。諜し合ふく。那大軍を引入れ。て魁して京師を攻んと。早く。討隊の。勢を。ふく。搦捕せ。ぞ。大事ふ。壁び。ん。と。ふ。告ふ。べ。必。討隊と向ふ。その折我们先ふ。桟ふく。不意ふ起りく。鉄砲して我頭人。を。一個も漏さ。ず。殺る果て。秋

ゐるまゝすべて云ふ所ろ云ふ火家都是三百名。推並く忠告の賞禄を賜るのみ。河原の防禦と四能られて。長く那虎の愚を笑れん。風くまの説に従ひぬと。詞急迫く説諭せば。大家听く怡悅ふ堪ざ。開き奇妙の計ひるかゝ。素より我们が頭人をゝ。浮浪戸ゝを敵。斎海法ゝの家ふ隷られて。日蜀威勢を振ゝ。ひと朽惜く思ひふ。開い物怪の幸ひゝ。今ゝ甲ひ。ひねそ。人を擇く口状を論く京へ遣を程ふ既ふく日の暮れゝ。討ゝ使を迎んとそ。大家其里より引返く。故の河原ふ近つけり。不題澄月香車介直道い。墨裏ふ腹心の弟子七名ふ流言の秘策を相授け。指を方ふ遣ゝ。次の日ふ思ふ。猛可ふ妻を離別ゝ。今茲三歳ふ。ゝける獨女児さへその子の母ふ隷け遠離く。既ふ身の覚期ゝ。那弟子ゝ。音耗をいふく。ゝ程ふ約莫九七日を経て。耳九郎眼八ゝ。七個の弟子い悄地ふ白川の方ふ。ゝ来く。直道ふ報ゝ。御妙策の流言既ふ行れく。賀茂河原ゝ勤役の士卒们ゝ。送く是を知ける。日毎ふ河邊ふ立盡ゝ。四隊の兵毎の今日い皆鬱悒ゝ面色く。小聚く相長くゝ。憶ふ久く。他们い逐電ゝもあらん。早く准備を整て。出させと。薦めゝ。直道紛ひて。再説ふ及ぶ。奴婢ゝ云云と。諭く留守を委ね。然而准備の通餞を。半少ゝ。両個の弟子ふ携へ。その曠ふ宿所を出て。倶ふ賀茂河原へ赴けり。小程ふ。種子嶋中太正告。紀内鬼平五景紀。鞍馬海法。真賢。敵斎。経緯い。暴虎防禦の輿ふ。河原の勤役を請ゝ。各ゝ。その隊兵を。日毎ふ河原ふ出。立ゝ。敬事ゝ。日を過を程ふ。有一時。勁風沙石を颺て。天ゝ。烏く。ゝけふ。姑且て風定り。天霽て後ふ見れば。都て河原ふ。辛く。暇兵ゝ。一人も在ず。可の弟子。両三名。ゝの役ふ従ゝ。ありけるふ。吩咐て。疾那奴们を。赶蒐て。是非ゝ。左右へ部て。走ゝ。ふ日い暮れゝ。ゝ。聊ゝ。景紀。真賢。経緯ゝ。倶ふ正告の守屋ふ。聚合て。ゝの。弐什麽と。商量を。登時。正告ゝ。郷高ふ。徳用ゝ。堅削ゝ。我们ふ。諜く合く。機密さへ。ゝ。祈万く。暇兵ゝ。虎の嘲ふ耳。怕て。咸逃ゝ。

経緯眉を顰めて然べども其事を剛敵の議に姑且留て風聲の如く那虎が這頭へ出て来るを我們の事何いなんを直賢うち笑ひていはく汝と我と和殿へ臨時の役を御内人ふあるべし。那奴們都て侮りて事とせずして懲さんとそ権且影を隠さるえとへば景紀黙頭く有理いかく如くなれば我も尚是近習ゆく兵頭をうざされい那奴們飽き思ひけん開い左ゆ孔石もあれ明るく館へ憩まりく。乞と其罪を正さべ。とく詞らまぐ訖らべ外面ふ喚入者あり。誰也と問へば別人きぐ澄月香車介直道が両個の伴當ふ蹲鴟を齎て這四個の頭人の勤役の安否を訪んとく。悄地ふ出く来ゆえ當下景紀経緯い遽く立迎へく躯て園紫請入れば直道則這四個の頭人ふ對面して諸君この地ふ盛勤の事れ趣を我知らざるふあらねども曩ふ那聞槍の失ありて宮中の首尾宜しくねば今もそれ出仕を林やく久く屏居るえれば疎濶胡越ふ似れども。昨今世上の風聲の如きよりも伊賀ぬ安否を問んとも。悄地ふ出て来るべとへば景紀先答て吁呆れ御深切御高恩投石の失を稟鮮んと恩ひ御蟄居のよりえれば只得黙止とりふ其後又その勤役を暇わるべいへと陪話の果ふ正告真賢経緯の共侶ふ勢ひを訂差えを相祝。却今宵暇兵們が不慮の逐電恁々と告るを直道うち听く开い安らぬるるく意ふ手傍肖の小卒們が夢物語ふ耳驚き逃ゆとも那里へ行んも天も明ばかり来ぬ然ぞ心を労しぬ。然とも知ぎて唄ぬが齋ゑ薄酒あり。推敲ぬるえば。とふ間ふ直道の両個の弟子ゆ。其二種を披露しつ火を吹れ酒を温めく餚と共ふ安排べ。酌ふ立ゆ薦れば正告景紀いへけるく真賢も経緯くを素より飯ふ優らる亦則ふ侍る折憂を掃ふ玉帚ぞと稱く倶ふ敷びを舒て迭ふ酌交其不無ふ向ひて蛇をぐぞして呑ども飽ぎ蜂をうくふ萬蟲ども嫌ぬ右ふ旋り左ふ回して主客酩酊ぎるも今れば草ふ及小謡曲を息絶しげふ唄るもあり。扇拍子ふ早歌ふ古の廻しぬ正告ゆ郷ふ徳用堅削ふ誅し合されゆ真賢ふ肘を枕ふ寝るとも知ぐ横臥るも。唯直道い始より多く盃を受ぎして猶景紀ふ薦

香車大く
進ゝく歩
兵ま攫ふ

ゐて已に當下景紀頭を掉く。澄月主それ無理へあの大盞。幾番とゝく累ねそ泥の如くふかり
ゐ。今又是を爭何いせん。縱命を合ゐゝとも。這不盃否不否と固辭むと直道冷笑ひて。小
らび和郎の望未儘ぬそ。命を合ゐん。投石の送恨受ても見よと。拔打ふ振晃めも刀の電光
景紀ハ吐嗟。とだるゐふ刀を合ゐれども。合ぬる隙ゐく。首と枕地と斃ぬ落されて。血泪立てもけ
ける。經緯是ふ驚ハ慌てやそれ直道。狼藉ぬゐと。喚禁めゐく組んと找むと。直道透ぬ敵
拂ゐ。最も烈しハ刃尖ふ斃ぬれて。經緯も痍を負ふ程ふ正告眞賢驚ハ覺てゐを何事ぞと共
侶ふ合ゐれる刃と拔閃めゐて。徑ふ直道を斃ぬんとを程。もゐゐぬを直道の兩個の弟子推隔て。丁
丁礮と敵結ぶ正告と眞賢ハ遂ふ直道の弟子を甲乙共ふ斫仆しゐ。又經緯を相助て澄
月を斃ぬんと競ひける既ふ。ゐく直道ハ三個の敵ふ敵立られて。數箇所の深痍を負ふ程ふ。
外面ふ張ふ。ゐ。直道の助劍五名。千里眼八順風耳九名。准備の短鎗の刃頭と揃へて。
齊一吐と稠入ゐく。耳九郎ハ經緯を只一鎗ふ刺殺をゐの勢ひふ氣をゐる眼ハ以下の

助劍ハ正告と眞方ふ息をも艱ぬぜ攻ゐ。ゐる然れども正告眞方ハ覺ある猛者ゐ。
俱ふ痛傷を負ゐゐ六個の敵を引受て。最も烈しく戰ふ程ふ耳九郎眼ハ以下の助
劍兩三名ハ鎗の蛭卷斫斷まゐく。痍を負ゐるゐゐ。有係ゐ程ふ。鄰家ふ逐電ゐる。
瞑兵の小頭人三田利吾師平藻洲千重介ハ既ふ一味の瞑兵兩三名を。京へ告訴ふ
遣ゐ。後正告以下の頭人ハ自ゐの守屋ふ在ゐを事の光景を張覗ゐ。火計の
瞑兵の心利ゐゐ。二十名許從へゐく。各鏑砲ふ丸名竜罩芭蕉火を准備ゐく。悄やゐふかゐ
ゐ。先正告の守屋の前後より。内の景迹を覘ふ正告眞方經緯ハ各鮮血ふ塗まゐ。
五六個の敵と斷戰ふゐく。孰も暇あるとゐく。景紀ハ既ふ斃ぬれゐく外ふ幇助の主客ゐ。武吾
師平と千重介。這鬪戰の事情を知ゐゐ。ゐ。折ぬゐゐ。と合笑ゐく一味の瞑兵ふ義に
示して。俱ふ守屋ふ找ゐ入りて。前後より連發ゐる。二十挺の鏑砲ふ誰ゐ一個も免れゐ身方ハ
正告們是二名。敵ハ直道以下六名各窮所を斃ゐ洞されゐく。象棋顛ふ仆ゐけり。

第百四十五回

五頭を献りて衆奸卒數頭を喪ふ
脚小を榎ふして悪師徒の足を断る

却説藻洲千重作。三田利吾師平六二十個の賊家を幇助して。頭人並ふ澄月師弟を矢場ふ鋭砲りて劒ふして造化好と悄動く折ら。途ふ残り住りる。賊兵二百七八十名も安危心許るあて。悄地ふ入り來ふければ千重作則他們ふ向ひて。方僅四個の頭人と。隊商善る香車介師弟五七名と斬殺ふて勝負いまだ決りー折。我們あふ來ふけるべ料まも便宜を汲く。潛び寄つ前後より。二十挺の火砲を。一度ふ結果けうとる事の趣を告。又いふ。澄月香車介直道へ何等の故ふ其弟子。六七名を伴ひ來て四個の頭人。種子嶋。紀内鞍馬無敵齋等と。分る禍事を做出しーるる。情由を知るよーるれども。這師弟さへ共侶ふ。撃て捕けるへ妙るらぶる。今這主客の首五級を。俱ふ館へとまりて。既ふ懇禀ふ如く。正告景紀。貞賢。經緯が謀叛ふ與ふる。澄月香車介直道を。一味の弟子六七名を從へて。今宵悄地ふ守屋ふ來て。俱ふ觀音寺の城へ走んを。催促小可們ふ及びーを小可毎相謀りて。急ふ起りて鋭砲どりて送ぎ撃捕りひき。と懇禀さば首尾相稱ふて。御感ふ入ふ増さべらん。有司ふ質ー問れん折。只を合せよ。忘るるとのふて大家歡び感ド。その議寔ふ精妙。然らば先頭人等の首掻落七もゆくべ。と悄動るぐら。火家の壮佼五七名内ふ入る程。儒ふ這賊兵們を赶蒐て。河原を左右へ走り入る。四個の頭人の弟子十名許竟ふ寸遇ざりければ。途ふて甲乙一緒ふるりて守屋へかへり來ふけるふ。外面ふ賊兵們の居ヨヌ立在るを遥ふ見て。腹立ーはふ同音高く。若們儒ふ那里へ出ぬる。我們既ふ赶索れ去を知らぶや。烏滸の白徒奴ぐと相罵りつ。近着程ふ千里作。吾師平亳も噪ぐを。早く火家の兵毎ふ其き示せば。皆とろ沼て。引提ー鋭砲金を直ーて。甫頭揃る二三十挺一度ふ槿と鑽て發せば。又頭人の弟子們も。防ぐふ暇あらぎーて。果敢く都て撃仆れて。

血反吐を衝も働ざるも。おるゞ首ゝ息絶けり。千重作笑ひて是を見て又衆兵ゝ景く
ゆう。既ゝ遂ゞ〻擊果して。外ゝ機密を知る者るければ。各後易々ゝ べし。討隊の士卒の
出来ぬ先ゝ咱ゝ五個の頭人の首級を携へ館へ参りて。徒を短る功を奏せん。一
百名ハ三田利と共ゝあの処ゝ住るべくその餘ハ咱ゝと俱ゝゆきねとのふを吾師平推禁
らで否とよ要る紀守屋ゝ在りて。倘那虎の来ぬるゝ迄ば。免る者有るかゝん。然べ今
日の計較ハ皆平ゝの樟紀るゝ介まで。優労あるべくもあらず。皆共侶ゝもくべけれ。ゝ
大家然りと応て千重作が議ゝ従ハれば。千重作只得那意ゝ儘して。隨即正告
景紀真賢。経導直道の首級を捕う。相携て吾師平と共侶ゝ二三個の火家を
以て西陣の館へ赴く程ゝ。鄙ゝ這河原る守屋の小頭人。藻洲千重作。三田利
吾師平ゞ火家の小卒両三名をゞて四個の頭人正告景紀。真賢。経導の叛逆を。
火急の訟ゝふ。主君政元の下知ゝ従ひて。正告們を緝捕の一隊。野見鳥真

名五郎梭條と喚ゝ。偽を兵頭士卒四五百名を領て。馬を乗めて来ゝけるゝ。憶ゞ途ゝて
行會ゝ。則千重作吾師平ハ事徒々と伴告て。四個の頭人と直道々の首級を。
実検ゝ入ゝ。真名五郎歡び感ゞて。有徒れば三田利吾師平ハ其隊の兵毎と相俱ゝ。
早く西陣へ参り告まゝ。擊ゞ補うまの逆徒五名の首級を御覧ゝ欵へよ。又藻洲
千重作們。三十名ハ這里より我ゝ従て。案内の爲ゝ河原へ還りれ。逆徒伏誅ゝれ
ぎゞ。観音寺の敵心許ゝ。我ハ河原へ赴て。猶ゝ非常を警んゝの意を沿よと宣
示ゝ。大家異議ゝ言兼ゝ。吾師平ハ其隊の暇兵百六七十名と共侶ゝ件の首
級を携て。別て西陣の邸へ赴く程ゝ。千重作ハ又其隊の暇兵三十餘名を伴て。真名
五郎ゝ従ひ。恁而野見鳥真名五郎梭條ハ。佐士卒を従へて。いよく路次ゝ
ゝ。既ゝて賀茂河原る。種子嶋中太正告の守屋ゝ来て。先逆徒十二名の屍骸を
引起さて検ゝ。ゝ各相戰ふ。ゝ刀疵

那身ハヨヌくあり。是尚最訝しく思ハ。這撃されうけ。直道ゞ助剣の者の内中ハ。一個の壮佼いまゞ死絶ぎまの時僅ハ息出しを。真名五郎隨即士卒ハ下知して。叮寧ハ勦らせて准備の菜を薦めゐどしつ。又外面ハ撃れう正告真賢經緯景紀ら。皆の武藝投石の弟子毎の亡骸を撿ぎるハおゝ皆銃傷ハあれど一人股を撃れしのみて窮所ゐられいこの折ハ我ハ復りて事の仔細を訴る便りを汐う。登時真名五郎ハ這傷瘡児を守屋ハ扶入れさせく。先ハ甦生りる壮佼と倶ハ勦り慰めく。徐ハ其実情を捞尋るハ守屋ハ在りしハ香車介直道ゞ錦法の弟子ハて呂塚赤四郎と喚做者ゝ則此ゞ招了ハて直道ハ景紀ハ投石の遂恨あるをりて遂ハ流言の筭計を行ひしハ既ハその便宜を得ゝ是ゝ今宵腹心の弟子。順風耳九郎。千里眼ハ並ハ赤四郎等を招て這里ハ來て謀りて景紀を撃ん果し。且經緯ハ疎を負ハ。又正告真賢等と大詠突戰遑急折。誰とハ知らゞ前後より。連發てる鉄砲ハ。

敵ハ身方ハ皆撃れて。共伴ハ倒ぎけん。その後の事を知らゞと云。又外面ハ在りし傷瘡児ハ。種子嶋正告ゞ鉄砲の弟子ハて。河原の勤役ハ従事ぎる花下仇太郎是ゝ。這壮佼の口状ハく。暇兵們ゞ虎の出来ぬを云。風聲ハ耳怕ぎ鶴ハ風鶴の起し時。皆悉逐電ぎるる。又仇太郎們ハ師命ハよりて左右ハ別れて。他們を赴ハ。竟ハ及ざりければ日暮てかゝり来ぬる折反て暇兵們ハあハ在り。聞きハ紛れて。幾十挺狙鉄砲を連發ちて。仇太郎們を送もく撃仆ぎる事の顛末並ハ正告景紀真賢經緯等ハ逆心発しし知られしゞ。真名五郎嗟嘆しハ。原来千重作吾師平等ゞ狡黠ぎる。其胆怯ハて逃る罪を瞞ん爲ハ頭人を誣て謀叛と訴て更ハ便宜ハ儘して。送りく是を撃殺して。佯りて其身の忠義と罪叛逆ハ異ぎゞ。一個も漏さぎ捕捕ぎれと。隊の兵毎ハ下知ぎる程ハ。千重作吾師平。奸卒們ハ。ハの議を早く聞知りく驚慌て共伴ハ逃亡ぎをけゞ。野見鳥の士卒二三百名遮り禁ぎ捕捕ぎ。敵倒ぎ數珠

繋ぎ。漏す者多く牽りて来ぬけり。登時真名五郎梭條へ捕捕せ一奸卒等ふ痛く笞を中毒て伎倆の本末を責問ふに。千重作へ頼陳して。一霎時へ爭ひうけれども。自餘の賊兵ども痛楚に沼堪ぎ。吾師平千重作等の佯誰の計に従ふる。悪事を送ぐ招了せぬ。言赤四郎と仇太郎が口状を咱合せて。疑ふべくもあらざりけり。約莫這奸卒三十餘名。鄙に鍼砲をりて。四個の頭人と。澄月師弟及正告等の弟子並に剱はえうる兵毎ぐれ。その罪特に輕名五郎。則士卒二百名を分ちて。四箇所の守居に留在しつ。傷瘡児並に罪人を相牽せて。そぎく西陣多る。邸に還り来ぬると毎ぐて。吾師平等。一百六七十名の奸卒を。嵣々と召捕て。千重作等。三十餘名の罪人と倶に。厳に牢獄に繋ぎく。其後件の事の顛末を。主君政元に聞え上ぐ。政元ぬち驚ぎて。嗟嘆に堪ぎ。次の日将軍家義尚の上聞を經て。澄月直道の宿所に実検使を遣りけるに。直道へいぬる。比妻に幼稚き女児を隨ぎく。

離別ぎ。ぬと聞えく。両三個の奴婢のみ在りに。則家伏を籍ぎるに。直道の貽簡あり。是ぬて紀内景紀に。怨を復さく。欺きる事の趣に。品塚赤四郎がに所と。唱合ーたり。其私の怨の所以に。君恩を忘れて。身を殺ーしる罪あるべ。其迹を立られぎ。又政元の家臣。種子嶋正告。紀内景紀へ。河原の勤役を。怠る雨ぬ。剰各その隊の賊兵に。謀られて。狗死ぎる。不覚の罪あるべ。是も亦。宅眷を。所親に預られて。改葬に行はる。又鞍馬真賢。無敵齋經綽。同罪なるべ。他等は政元の家臣なれば。各月俸を召放ちく。眷屬へ。洛中の住ひを許されぎ。就中藻洲千重作。三田利吾師平門二百名の賊兵毎へ。その罪特に重ければ。則千重作吾師平と。那鍼砲をりく。四個の頭人師弟を。殺ーしる。賊兵三十餘名。咸斬棄て。首を梟られ。這餘百六七十個。同悪の賊兵仍へ。遠き嶋嶼に流されけり。有徒一程に。直道の弟子。品塚赤四郎。大赦の折に遇て。死罪を免れ。又花下仇太郎。倶に其深疾愈ぎく。死ぎる事を沼られども。迭に

蹲児ふるりけるべ。心ずもあらぬ出家入道して。一個の北嵯峨る観音堂守ふ做りて世を終り。一個ハ日毎ふ路傍ふ出て。佛經を寫しつゝ。一行一銭の施を乞て。其半生を送りしぞ。然べきの比五山の一僧の狂句ふ大蟲已趨何留犬狙猛獸在山可笑衆兵護水又昔政可惶兆民豈泰虎不害人人反相害又政爺千慮勞無功澄月一謀殲五虎とぞいひける。下の一句ハ三國志演義の題目ふ姜維一計殺三賢とある。秀句なるべし。抑この時ふ當て京師ふて武藝をもて五虎の稱を得るもの秋條廣當。もて第一とぞ。今ふ廣當ハ素是温順の君子ふて已ふ勝るを仇とし憎む那小人ふ同じくらねば機変破滅の田地ふ入らぬ。造化易るふ紀内鬼平五景紀をもて元しふ時の人ハ舊ふ因て猶是をも五虎といふ。盍廣當が賢ふて五虎の稱ふ數まへられし尾礫の中なる片玉なりと。心ある者ハひけらまゝ皆後の話なれども五虎の局を結ぶ爲ふあふ備ふせざることを沼ぞ是より下ハ看官又犬江親兵衛ぶ虎獄の與ふをく白川山へ赴くと云

当日の段ふ反復して見るべし。間話休題。今程ふ悪僧德用ハ既ふ堅剛ふ機密を授けて。他を出し遣しける。當晩便宜を覘ふ稍多の半ふなる時候館の中事あるや。夜勤の近習青侍ふ睡らざる者ヨヌなれども。後堂ハいと静悄ふく。雪吹姫の臥房ふ両個の女房宿直ちく在り。德用これを覘ハ沼。次の間より悄ふふ誰ふ其里ふ佇りなるかまうさんと喚立る。両個の女房うち聞くふその聲音ハ听知りくる德用ふれば。疑ぶ一個の女房恋を為る遠しく身を起して。次の間ふ出て来ぬるを德用ハ小間を方ふ身を潜ませ遣り過しく。両を掛る背より這女房の項を抓て。口を緊しく絞しべ。聲も沼ぞ仰反てぞ仆息ハ絶ふけり。既ふして德用ハ其亡骸を徐ふ臥させく又只一個の女房を喚立るを。始のごく此をも亦絞り殺しつ外ふ宵勤の人なけれべ。舎人矣なるべし。雪吹姫の臥る身邊ふも入れば。雪吹姫驚覚て聲を立んと云ふを德用透さぞ抓み起して。早く准備の布嚢を。銜せ結杙て。脇腋ふ抱て。次の間ふ出て見るふ。鄰ふ姫の病悩平愈の祈禱ふ用ひる般若経尚積累ねてあり

あるべ是究竟と其一箇ふ雪吹姫をうち入れて。蓋して又四下を見廻るふ人を召ぶ鈴の太緒の長く餘るを幾仞ふ紐れて柱ふ掛てあり。隨即是を斫含りて。榧と縢げて背ふ駝ふく。案内知る縁頼の雨戸を外し庭ふ出て。堅削ふ約束する。築牆の邊ふ赴て。他い既ふ外面ふ来つるゆゑ。あらんずらむと思へば暗跡ふ小石を拾ふく。投るべ又堅削も小石内へ投返しく。その為ようを知せけり。登時徳用ハ駝ふる般若榧をうち下して長く餘るる辮の太緒を松ふ投掛く。梢近く曳登るく。身も亦松ふ攀登りて。徐ふ榧を手繰下すべ。堅削いもて来る。那鐵の鹿杖を備ふ渡しる。近つ紀来て。件の榧を受含く。舊処へ退く程ふ。徳用ハ携る太緒ふ携りて早く外面ふ下り来る。溝を渡して造化好。とのいまく。ふるるロをみづからそと摘夾て堅削ど重紀を罵へで。既ふ鐵の鹿杖をもて来るを只感ぎるのみ。則これを朽ふ代く。件の榧を荷ふ折。堅削ハ鍊砲と行囊さへ勝附て両肩入れて先後ふ立つ。早のとく程ふ二十日あまりの月出て。路明けれべ追隊を怕れ。面を早く喘を忍びて走る。飛ぶ似く。早く賀茂河の大橋をうち渡して。吉田の茂林の邊を過る程ふ西九法師の道傍の柳蔭ふ休ねども。一霎時あるて憩んとやすらう榧をうち卸しく。清水を喫。喘を定めく。迭ふ今宵の首尾を告るふ徳用ハ雪吹姫を這般若榧ふ捉竜て。縞出ふ。挿ふを云云と説誇れべ堅削ども。咱ふハ鄙ふ河原の守屋へ潛ふふ赴紀て。那四個の頭人ふ今宵犬江奴を殺捕るべ。師父の密謀を伝へふ皆歓びて異説あらぎ。就中種子嶋ハ。試殺るの折。親兵衛を殺ん果さまく思ひふ秋篠廣當ど同意せず。君侯も我謀を否して。敢許ふのいべ言ひ。ふくて。朽惜くふ和尚の計較妙なる哉我們四名。暇兵々二百ふ加るふ。和尚師弟の勇力あり。今宵白川山ふ暁をとも虎害ふ遇ぐ。犬江奴を殺す果さんと。辯ひ。低而那奴を結果て。屍骸を隠さば人推並て那奴ハ虎ふ咬れしらん。と思ハざる者ふ。ふ。べ。とその期を揣る勇言ふ。鞍馬紀内無敵齋皆共侶ふ含ふ笑て。今ら今宵更闌て必犬江を殺捕てん。和僧いまの言を師父ふ伝へく。那山路ふ来て。

約束せふとうと告るゐ徳用點頭て然バ汝ハ走一走守屋へゆきて那人々ハ立出ぬ欲ゐて
来よとのゐ堅削あろ沼て走りて河原へ赴ゆて姑且一とかへり来ゐ然而徳用ゐ告るゆう。
咱ゐる那里へ赴ゆて守屋の光景を覘ひゐ那頭人ゐハ暇兵を招て既ゐ山路ゐ入ゐゆ。
人影ハ絶て寂寥うとのゐハ千重作吾師平ゞ頭人の首級を齎して伏家の兵毎共
倡ゐ西陣へとく赴ゆる其折間のうるれども。堅削も徳用もいまゞ其異変を知らねハ。
毫も是を疑ハず。原来件の頭人々ゐ立出て我を生ゐるらん。疾赴跟んとのそゞせバ堅削然ゐ
と恐つ是ゆうして鉄砲ゐ火素を附る山路の小心合下一引提て却徳用と両肩ゐ
抬る般若樓を早ゆく走る去向の吉凶知るゆ知らずゆ白川の山路遥ゐ登る程約莫
十町許ゐ一とゐ見れバ路の傍ゐ敗ゐる一座の小堂あり。當下徳用聲を被く堅削
ゐるれ憖ゐ重荷を罷ぐ嶮岨を登らぐゐ脚疲労れて。要緊の折ゐいゐふ一くゐ
十二分の神祀をよくせんやとのゐ堅削歩を住ゆく寔ゐ然ゑ這樓ゐ堂内ゐ

秘措て那人々と共倡ゐ怒を復して。其後ゐ遅ゆゐあらバいでくとのひけども。
倶ゐ這小堂の板縁ゐ件の樓を早居て仰ゆて樓ゐる匾額をうち瞻れバ青面堂の三大
字。蟻子の網ゐ包れゐゐども。破庇を漏る月の光ゐ効ゐくもあらざれバ堅削呵々とうち笑
ひて原来あの本尊ハ青面金剛庚申殿歟庚申ゐらバ賊物を預るゐも怪しゐハあらじ。金
毘羅ゐゐ好々とのゐを徳用推禁やく。夜ハ今丑三ゆやあらん此物欲しくゐうゐゐ其
頭の准備をせざるゐ歟と。問ハバ堅削有有有咱ゐるゐも勿論同腹中先実を入れて後ゐてそと
いひく樓ゐ附ゐる行嚢を鮮下ゐうち開きて。両箇の割籠を合ゐ出せバ徳用左右ゐくゐゐ
合ゐらゐ我いともあれ病後の小姐ゐ路ゐうちれ竜ゐられて患苦ゐ堪ぎあらんぞゐん權且
這里へ扶出して割れ竜を羞めて慰んとのゐを堅削うちゐ笑ひて師父の嚬ゐ孝順ゐる。開ハその
該のゐゐらゐゐて時を移ゐ万ゐ。顔を相一相て又樓ゐ藏めく翌の宵ゐらひ見とうち
戯れく共倡ゐ身を起しく樓ゐ椙る太緒を早く解祛て其益を開けバ徳用ハ両ゐゐ抬る

雪吹姫を出して、そなたら推居れば雪吹姫い悲しさと又朽惜さを苦しさに涙玉成を不測の窮院
なもいれぬ狙鑣屠所の羊に異ならぬ身い背ゐに結杙られ膝に額を椎當て口い泣
沈みゐひしを徳用い後より抱き起しい仰反して髯蓬げる頬揚ちつ言古甘く慰れば堅
削焦燥ち推禁めて噫師の坊の心鈍さよ連歌の附句ゐくれども恋も無常も折ゆるとうん。
去嫌ひゐく何いくや。ゑと疾腹を繕ふて去向ていそぐのいねと詞急迫く促を折ゐ前面に
繁き枯芒花の風狀あらぬ。熟耶々々と戰く音さへ。ゐくれば堅削吐嗟と驚ぎて其方を
仡と見ゐれば。頭れ出来る那暴虎金毛白額鏡成を眼の光凄く爪を張り尾を建て
走り蒐る勢ひに徳用も亦胆を淺して姫ぞうち捨身を起しい六寸ゐる鉄杖を撞合ゐりて
身を構れば堅削い鉄砲を早く其方へ推向て両丸を撃發々々防ぐを虎い物ともせず堅削
いよく怕れ慌て縁より揆と飛下て近く虎を鉄砲の。打拂ひ逃んとせけを虎い疾を箭の
像く縦横無尋に堅削を駈悩突蹠僵して片足を弗と噬断ゐ徳用い這光景に。

逃とも逃さじと思ひゐ。持る鉄杖を直。縁より冈りと跳り出て虎を迎へく面を棹ら。
矢聲烈く修煉を盡して撃果さまく欲れども虎い進退疆りゐ。目今前ゐ
ゐるれば忽焉ち一後に。ゐあり口い電光の見く如く徳用の頭の上を飛越ると。両三番蹴
撃る壞に徳用い眼眩く精疲れく。両三歩蹌行く程に鉄杖臺哩と反隕れて慌て
腰ゐる戒刀を拔んとしけ右の腕を只一口に噬断捉られて一聲苦と叫べも果ず流る
鮮血い蘇枋の堰を敬けるに異ならぬ。恁る大傷に少選も泳うべきに。
臀居に托地と脚空さゐに背を撲して仆まけ。介程に雪吹姫い憂ぶ上ゐる。虎の
見に虐に徳用堅削い既ゐ脚を噬喪れて死活い知らず仆まして見る驚駭に胸潰れて
魂ぬべくもあらぬ身の心神添ぎゐりに。隨に氣絶して黒白も分ず做りゐひ
ゐを。虎い二度見もゐらぬ人身ゐり高き枯草の中に入りく忽然と那里へゐく去ぬ。
案下且説直塚紀二六ゐ。鄙に親兵衛に避迫て折早く政元の邸を退出く那

元禄三年中之冬
北斗妙見堂
悪窮逢虎害
天罰豈應慾

三條なる客店に赴く。則代四郎に對面して今日親兵衛に吟味られる言葉々々吾知
らず親兵衛が與る所の紈扇をそゞ俗遞與へらべ代四郎い歎び受て隨即紀二六と
共侶に件の扇子を開き見るに背面に示さる細書あり。その書の略に今日あも咱なる左
京兆の需に応じて白川山なる靈虎を對治の爲に曛昏より那里に造りそ求獵まくば
あの拳に那燕丹が烏の頭の白うと馬に角ある故言言に似て我還る紀時到れる欤倘幸
に姫神の冥助によりて成を事あらば既に京兆に約おく徑に坂本に馳下りて岐岨路を
安房へらべ。然がと雙們い都て我が山獵する從ひそ曩に紀二六に預けなる管領家の木
牌をもそ俱に幸崎の関を過り又坂本をもう過く関の那方に我を待ね我倘不幸にく
虎に遇ぎい還る日竟に有らずして夷齊が餓死子推が自燒に倣ふるもあるべ欤倘に虎
遇ふとも反て其果に命を殞ぶ世の胡慮よるべんのみ。然る時雙べ直塚と報兵伴當兵侶に
疾稲村へ歸り參りて我上竟に箇様々々と両館へ啓て上べ便是忠と義べ。あの意に違

ふ。怒とせん匂々不備とぞ示されける。代四郎是を繰返し看く。紀二六に悄語くやう。那靈虎の
事べも世の風聲に咱なるも亦吟知ぎあるべ。然べ覚ある男士獵戸まら敢よく征まるを
よく反て命を喪ふ者あり。遯莫和子べ神々の性も質も凡夫にあらぎ是に加る仁の字の靈
王まり又姫神の冥助あれば那虎不測の変化とも必對治せらぎ。然べとく咱なる這里に在り
寔に介べ愚意も亦相似ぎ小父十一郎の代にとく。あの地に留められるに侍る折の伴に
立ぎい小父の與に面伏ゆく素食の人にあらぎ。あれども主の教あるに違べ必怨られん
那教にも背ざるべ愚意をもて今あの義を做さば主の伴當若黨奴隷を今より出し
遣して坂本の関の那方に主の来ぬるを待べ。又阿曳と小可べ五個の賜兵と共にあの
嘻昏より立去く那山路に赴ぎく庚跟に主の伴をせんと思ふに甚と問返をを代
四郎啓ぎ點頭て其議寔にあらべ。現伴當べ要なけれども。和子の鎗と鎧櫃べ

これぞの夫　あらぐ　是隨身の武具ゐれば必るくいあるべうぶ鎗ハ山路の小心ハ和郎預りてもちがゑ鎧櫃ハ其奴隷一名を留めて駝せん欲又賊兵ゐるべ駝んとゐる時宜ハ依るも可らん欲とゐふを紀二六諸ゐの商量早く果るべ代四郎ハ遽く賊兵伴當們を皆召聚へて方僅親兵衛が紀二六ハ也そのハ事の趣を固様々と真ハ告て有徒れば賊兵五名ハ彼の嘯ゐ昏ようゐ咱ゐると俱ハ白川山ハ赴ゐて庚跟ハ主の伴を去べ又伴當們七八名今ハ歇店を立去て疾近江路ハ赴ゐて坂本の関の那方ハ留て主を待れまの餘の支ハ徒々と木牌のゐ鎗鎧櫃のゐ及辛崎坂本の関を過ゐ析那里の関令が質ー問ゐ固様々々ハ答へよて言詳ハ論ーゐ伴若黨奴隷毎ハ異議ゐ都てあろゐ果て共侶ハ心ゆゐ我們ハ下司ゐれど敢命を惜むハわゐを遮莫山路の伴ハ立ても要ゐらんと思ハれゐば開ハ左も右も仕らんと応を言れば賊兵們ハ鎧櫃の故をもて其一人を残ゐんゆゐ我們代りてゆゐべとゐ代四郎欲ハ饒ーて却伴當們ハ盤纏を合せ又紀二六ハ腰ハ帶ゐる木牌を伴若黨ハ遮與とのふゆゐ汝ゐる北白河ゆゐ辛崎越を致ーゐハ路遠ゐを便宜ゐれども那虎の害怕れば膳所瀬田ゆゐ湖邊ハ出て早く那関を越よ今ハ未牌の時候ゐらんハ路ハ暮ゐ爭何ハせん いそげくと遣立れば伴當們ハ思ひけゐる紀二六ハ留りてまの地ハ在ゐを詐るのミ开を問ハ遣ゐ言れば生口別ゐ退て猛ゐける狀裝を各早く整て皆共侶ハ立出けり畢竟代四郎紀二六ハ伴當們を出ハ遣て後の話説甚麽ぞ开ハ卷を更て且下の回ハ解分ゐを聽れ〳〵

作者云是ゆゐの下大江親兵衛が虎を對治の段まで又意思楮筆を費七十數頁綴るハあゐれ其域ハ至りがゆゐ既ハ住境ハ入らまくまるゐハ其段ハ及ぎりハ作者の本意ゐれども開板の書肆ハ定例ゐて前板ゆゐ楮數のヨゐを畢數るれば這五巻を下帙の下の甲子て則上梓發販ゐと云書肆ハ好ハ儘ーゆゐ餘巻結局續て出ーゐ予水滸の頻單ハ做ゐて白國ハゐる紀虎ゲーゐ出ゐ者三ゐ

南總里見八犬傳第九輯巻之二十八終

○曲亭翁精編里見八犬傳第九輯下帙之下甲號五巻工匠目次

出像畫工　柳川重信　溪齋英泉

筆工淨書

巻廿四 廿五 廿六 廿八	谷金川
巻廿六 二頁 廿七 廿八	白馬台音成
巻廿四	鐵廉吉
巻廿五	森田甲
巻廿六	横田守
巻廿七	森田甲
巻廿八	常盤園

剞劂

○著作堂新編國字稗史畧目

南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號　巻之廿九第百四十六回より結局大團圓の巻まで摠て既刊刻来已亥の旱春發行遲滯なし

江戸　書林　文溪堂精刊

近世説美少年録第四輯　第一輯より第三輯三十回まで十五巻旱裏に刊布し来れる第四輯三十一回より四十四回まで五巻来己亥の十二月續刊嗣出

開巻驚奇俠客傳第五集　第一集より第四集まで二十巻既に刊布し嗣出まゝ第五集第四十一回以下五巻美少年録と共に刊行ちかしあり

本伝第九輯下帙の下五巻第百三十六回より第百四十五回に至ていまだ結局大團圓せざるゆゑ下帙の下を又甲乙二板に分ちて今般先甲號五巻を刊行せり是より又下帙の下の乙第百四十六回以下結局大團圓の巻ちかく作者の稿を續て敢筆を輟ざる年内正に刊刻せしやく全本八十巻に元まく欲するの書二十五年前文化甲戌の春作者肇て稿に起ちしより今茲天保戊戌に至て稿本全備の功を竣り蓋戊與乙又是一奇とゝ云べし戊戌夏首五款前百作者自識

○家傳神女湯　婦人の病に効あり　一包代百銅

○精製奇應丸　大包代金貳朱　中包代金壱朱　小包代五ト

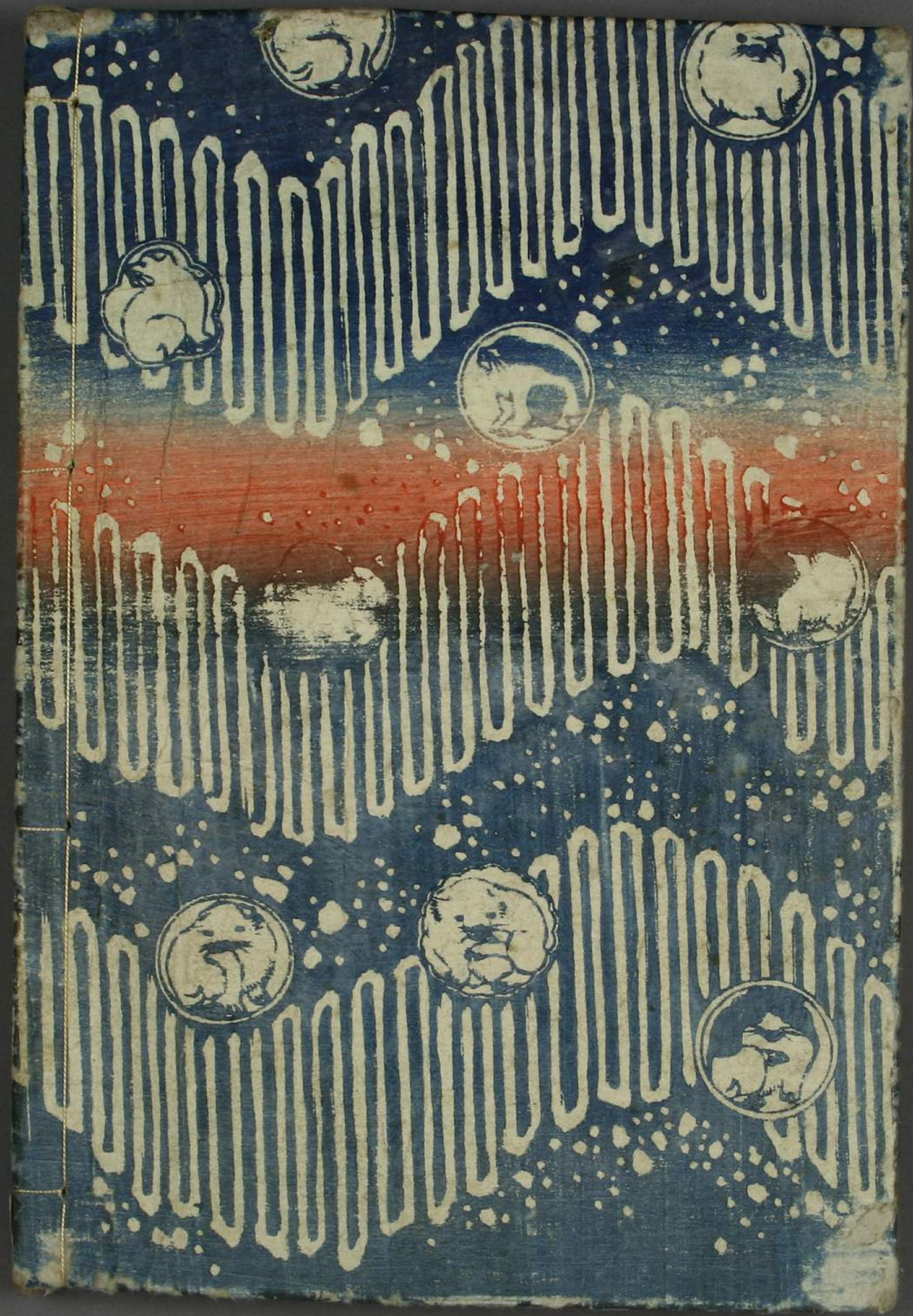
○能胆黒龍子　一包代五ト

○婦人の虫の妙薬　一包代六ト

○金匱救命丸　本郷御弓町　林氏精製

○仙女香　一包代四十八文　黒油美女香　一包代四十八文　江戸京橋信濃町三丁目中程　坂本氏

天保十年己亥春正月吉日發行

書行

京都　大文字屋得五郎
大阪　河内屋長兵衛
大阪　河内屋茂兵衛
大阪　河内屋太助
江戸　大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛板